真っ黒な雄の番犬が二匹いた．胴体は一抱えもあるほど大きく，恐ろしげな顔をしているが思いの他人懐っこくなぜか私によくなついた．夕食までの間，近くのマツ林に一人で採集に出る時，宿の主人に断ってこの犬を連れて行った．静まり返った森の中での採集であったし，突然武装した一団が通り過ぎたりして心細かったがこの犬のおかげで非常に心強かった．この付近には気性の荒いロバが放し飼いになっているので牧場に入る時には注意が必要である．ロバは温厚そうな顔に似合わず見知らぬ者にはかなり攻撃的な行動を取ることがあるので，彼の存在は非常に有り難かった．実際ロバが近づくと，低くうなっておっぱらってくれるから安心して地衣類の採集に専念できた．

（つづく）

新　刊

□Heusden E. C. H. van：**Flowers of Annonaceae：morphology, classification and evolution** BLUMEA, supplement 7. 1992. pp.218. Rijksherbarium, Leiden Dfl 75. 00.

汎熱帯に分布する原始的被子植物の科である．Annonaceaeについて，科内の花の形態の変異を分類学的見地から研究した論文である．蕾，萼，花弁，雄しべ，心皮，胎座，胚珠等についての詳細な比較観察から，分類に重要な新形質を見いだしている．これら花の形質に基づいて属の範囲づけの議論を進め，従来のいくつかの見解をただしている．結局この科を20のグループに分け各グループごとに花の形態の記載を行っている．Annonaceaeの中の分類を勉強するうえで重要な文献であることは言うまでもなく，同時にまた，原始的被子植物の花の構造の多様性を理解するうえでも見落とせない文献といえる．（寺林　進）

□Fahn A. and Cutler D. F.：**Handbuch der Pflanzenanatomie XIll, 3 Xerophytes** pp.176. 1992. Gebruder Borntraeger, Berlin. DM 124.

本書は乾燥，半乾燥，気水地帯に成育する植物の形態，解剖学的特徴における適応戦略に関する最近の知見をまとめて紹介したもので，著者ら自身のオリジナルの研究も含まれている．植物が陸上に姿を現した時から植物たちの乾燥との戦いは始まっており，普通の植物でも体制内には乾燥に対するいろんな工夫がこらされている．植物のなかには，乾燥地帯へと自らの体制をさらに変革しながら分布を拡大していったものもある．本書ではこのような乾燥地帯に適応した植物の形態，解剖学的特徴を葉，茎，根といった器官について組織レベル，細胞レベルで詳しく紹介している．いかに効率良く水分を取り入れ，体内に保持し，有効に利用できるかが最も重要な点である．例えば，乾燥地帯の植物の葉は棚状組織が多く，海綿状組織が少ない傾向にある．棚状組織が多いほど細胞の表面積が増加し，光合成時のガス交換がすばやく行える．こういった組織の特殊化は，乾燥地帯では，短い期間に降った雨を短期間で有効に使わなければならないことに適応しているという．そのほかいろんな部分で特殊化がみられ，いかに植物がうまく環境に適応してきたかが分かってたいへんおもしろい．（寺林　進）

□浅井康宏：**縁の侵入者たち帰化植物のはなし**朝日選書　1993. pp.294 ¥1,300.

帰化植物の調査研究で知られる著者が，これまでに発表したものに新たに書き加えた入門書としているが，内容はかなり密度が高い．とくに外国に帰化した日本植物の振舞いはこれまであまり認識されていないので，帰化植物の理解を深めるのに役立つ，この項には約80ページが当てられており，著者の気の入れようが察せられる．もう一つ大きい項目は約100ページ30種類におよぶ帰化植物の銘々伝で，永年の調査にもとづく知識が披露されている．このほか環境問題と関連して，水生帰化植物の影響について注意が喚起されている．植物の予備知識を持つ者には大変有用な読者で，これからの観察眼を豊かにするだろう．ただ，表題は帰化植物をおしなべて悪者扱いした印象があり，工夫してほしかった．表題の決定は販売政策からの要求が大きい．帰化植物にはもちろん始

末におえない悪者もいるが，多くは人工的環境を黙って緑化することによって，環境悪化の緩和に役立っているはずである．マスメディアが認識を改めてもらいたいものだ．なお最近の大村敏朗氏の私信によれば，本書277ページにあるオオブタクサの和名が久内清孝氏の命名によるとするくだりは，事実とは異なるとのことである，和名の命名や選択については規則があるわけではないが，われわれは情報交換を和名で行う場合がはるかに多く，どれがより広く使われるかは，それぞれの和名を与えた者にとっては由々しい問題だろう．こういうことは研究者の人間関係を知る資料となり得るので，分からなくならないうちに，いきさつを知る人が公表して記録にとどめてもらいたい．

（金井弘夫）

□筒井貞雄編：福岡県植物目録第2巻　福岡植物研究会　1992. pp.386. ¥8,000（送料込）.

1988年に第1巻（シダ植物）が刊行されているがその続編で，裸子植物，被子植物の一部（ヤマモモ科〜アブラナ科）がまとめられている．主体は254ページにわたる標本のリストで，産地，高度，採集者，番号，年月日，花か果実かなどが克明に記録されている．続いて5万分の1図の1/16のメッシュで，これらすべての植物の水平垂直分布図が示される．植物リストの配列はメッシュ単位でまとめられているので，分布点と標本データを比較するのが容易でありがたい．というのは，汎用のデータベースを作ろうとすると，産地の位置座標がわからないと役に立たないからである．最近は分布図のついた植物誌が普通であるが，この点についての気配りまでされているものはなかなか無い．上質紙を用いた立派な装丁で小人数でこれだけのことをやるのは，労力はもとより経費が大変に違いない．環境庁あたりがこういう仕事に援助を与えればよいのにと思う．環境庁の全国調査などは，そうした方がはるかに能率よくかつ信頼できるデータを集積できるはずである．福岡植物研究会の宛名は〒815　福岡市南区平和2-11-8筒井方（振替福岡6-5060）である．

（金井弘夫）

□福岡植物研究会：**福岡県植物目録**（2）60pls. ＋385 pp. 1993. 〒815 福岡市南区平和2-11-8筒井貞雄方．¥8,000（送料共）.

目録（1）の「シダ植物」発行以来5年，待望の（2）が出版された．これには種子植物の約4分の1，すなわち裸子植物亜門と，被子植物亜門の双子葉植物綱の離弁花類の一部（ヤマモモ科からアブラナ科まで）が含まれている．**巻頭**にタンナトリカブトの美しい図，続いて花や群落の天然色写真124個，基準標本を含む腊葉の写真12個，解剖図付き線画8個が，合計60ページに収まっている．

本文**第1部標本目録**は51科・412種が分類順（科の中の属・種の配列は学名のABC順）に記録されている．各科の最初に総論的な種類の紹介などがあり，直ちに各種についての記事に移る．記事の大部分は標本の産地で，ほとんど隙間なくページを埋めている．産地の記載法は，5万分の1［地形図名］と，それを縦横4つ割りした16個の小区画番号（11……44）を並記して見出しとし（例：［**背振山**］**23**），その区域内の産地を列記する．地名は詳しく，標高までいれ，採集者氏名，年月日，標本番号，花や果実のことなども入っている．産地の他に〈**ノート**〉には，県内での分布状況，林内・林縁・渓流沿いなど生態のこと，変種・品種・他種との雑種，近縁種との区別点，などの説明がある．これらの他に〈**メモ**〉として分類学上の意見などを述べた項もある．

第2部は**分布図**で，毎種1図の412図が用意されている．各図は等高線の入った地形図で，上記の小区画内に産地がある場合に黒丸が入っている．地図の下の枠組は垂直分布で，上の地図を南北に見通した形になっていて，100m単位で小点が存在を示している．

この目録（2）の資料になったぼう大な数の標本は，福岡植物研究会々員57名の方々および非会員66名の方々の調査・採集・研究によるものだそうで，本巻を執筆された14名の方々と共にご努力は大変だったことと深く敬意を表する次第である．

（伊藤　洋）